第8回「私と新聞」親子作文コンクール

入賞作品紹介 ⑱

私と新聞

会津若松市 北会津中1年 渡部（わたなべ） 桜妃（さき）さん

私の家では、母が弟を見送ったあとに、新聞をポストからとってきています。忙しくて新聞を読めなかったときには、週末にまとめて読んでいることもあります。なぜそこまでして新聞を読むのだろうと、いつも不思議に思っていました。祖父は「新聞は社会とつながる大切な情報源だ」と言っていました。私は正直、テレビやスマートフォン、タブレットなどのメディアがあるのだから、そんなに新聞にこだわらなくてもいいと思っていたし、母が週末に「子供新聞ぐらい読んだら?」と、すすめてきましたが、文章の区切りも分からなかったし、一つの記事がどこから始まって、どこまで続いているのかも分からず、意味不明でした。なので、学校で関心を持った記事をスクラップしてノートにはって、その記事を選んだ理由と記事に対する感想を書くという「新聞トレーニング」をやると聞いて気が重くなりました。

しかし、何度か新聞トレーニングをやっているうちに、文章の区切りが分かるようになり、新聞トレーニングが楽しくなりました。時々ですが、家でも新聞を読むようになりました。

新聞は、見出しで見たい記事をすぐに見ることができるし、日本の社会や経済、地域の細かいことや天気まで、知りたいことが分かりやすくて良いと思いました。これからは、テレビやスマートフォン、タブレットなどのメディアに頼り過ぎずに、新聞も使っていきたいと思います。

新聞が作ってくれた絆

母 渡部（わたなべ） 知美（ともみ）さん

私がまだ子供だった頃、祖父との思い出の一つに新聞があります。祖父はもう他界してしまいましたが、元気な頃は気づくといつも新聞を読んでいました。私は子供心に「なにが面白いんだろう?」と思いながらも、祖父のまねをして新聞を読み続けました。漢字もあまり読めず意味もわからずでしたが、祖父と同じことをしている自分が少し大人になったような誇らしい気持ちだったことを覚えています。

ある日、いつもは読み終えた新聞は片づけてしまう祖父が私に「はい」と、渡してくれたことがありました。私は祖父に認めてもらえたような気持ちになりうれしくなりました。その時の祖父の笑顔は、今でも思い出すと心が温かくなります。

父も毎日かかさず新聞を読んでいて、「今日の新聞にこんな記事が載っていたなぁ」などと、記事の話題になることも度々あります。

しかし、私の子供たちは中学一年生と小学三年生というのもあってか新聞にまったく興味を示さず、記事の内容をわかりやすく伝えてみても無反応で「今の時代の子供に新聞を読ませるのは難しいのかな」と、少し寂しく思っていました。

ところが中学校で新聞記事をスクラップする時間ができ、子供も新聞に興味を持つようになってきて親として子供の成長を感じるとともに、あの時の祖父の笑顔も思い出しています。

私にとって新聞は、いろいろなものが変わってしまうこの時代でも、いつまでも変わらない家族の絆であってほしいと思えるものです。